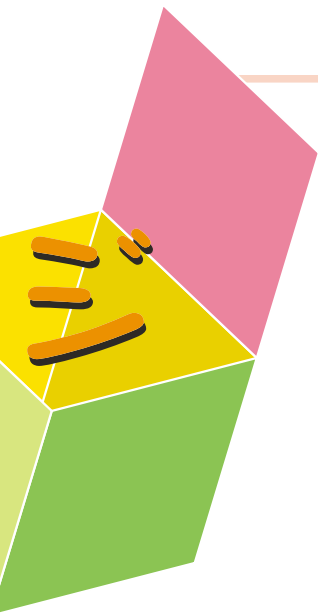


GALLERY ギャラリー



「さつき」花
辻 治郎さん(有漢町上有漢)



「草原の家」トールペイント
渡辺 由花さん(成羽町下原)



「ひまわり」ちぎり絵
西 信江さん(落合町阿部)



「ひょうたん」瓢箪
前原 隆二さん(備中町布賀)

ミニ★ピクアズ



「春まきソバの花」(松原町松岡)写真
(6月12日「春まきそばの花見会」にて撮影)

松原そばの会では、岡山県内では珍しい春に種をまくソバの栽培に取り組んでいます。花見会に訪れた人たちは、約80坪に白くきれいに咲く花を鑑賞しながら、石うすそばひきやそば打ち体験をしたり、花畑をカメラに収めるなど思い思いに楽しんでいました。



「硯箱」烏城彫
前原 敏さん(本町)

作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など
【作品】絵画、工芸品、町の風景写真など
- 自作の未発表作品で、一人一作品とします。
 - ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。
(撮影が困難な場合は、ご連絡ください)
 - 住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。
- ※締め切り掲載号の前日の末日(必着)

- 【送り先】〒716-8501(住所不要)
高梁市役所企画課公聴広報係
- ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。
※提供いただいた写真等は返却できません。
- 問い合わせ 企画課公聴広報係 ☎0210
Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp

市民のページ

文芸たかはし

(敬称略)

短歌

資格得て職得し愛孫にいぎなわれ阿蘇のいでゆに老いをながしぬ

夜着し浴衣の揚げの糸ほどく松山踊に娘の夏終はり
小野はる恵 (原田南町)

花には水子供はほめよ人はみなほめられたくて努力するもの
坂田 昭夫 (松原町大津寄)

家守り頭痛の種の草刈をシルバー人材頼み安堵す
原田 由き (高倉町飯部)

花言葉うりぎなのよ紫陽花は雨を待ちつつ明日は何色
亀石恵美子 (川上町仁賀)

常山の芝生に石の風車小はくるくる大は悠然
宮本 宮吉 (川上町七地)

俳句

父母居ます菩提寺に鐘藤さみし
三村 節子 (伊賀町)

厨窓あければさつと薫風の
長原 茂子 (備中町西油野)

風光る花の苗植え一呼吸
平松 幾代 (長寿園内)

あざみ花きれいと手にししかめ顔
結城 成子 (宇治町宇治)

川柳

つつがなき今日の幸福明日も有りたし
藤井タツ子 (備中町西山)

夏祭一人娘が客で来る
中島 清市 (成羽町屋出身)

地名をあるく

九、鉄砲町



「鉄砲町」は、旧高梁市「鉄砲町」で古くからの町名の一つでした。北の牢屋小路(現・花水木通)から駅前大通りを過ぎ、南の夷小路まで南北に細長い町筋で、東側の弓之町、西側の高梁川(国道)に沿った町であります。

「鉄砲町」は、近世松山城下時代、北の御根小屋を基点に町の東・北・西の三方に配置された「中間町」や「弓之町」(新丁)と同じ家中屋敷町の一つで「鉄砲丁」と書かれていました。池田氏時代(元和三年一六一七〜寛永一八一一六四)足輕を居住させるのに取り立てられた堅町型城下町の一つであります。次の水谷氏の正保頃(一六四四〜一六四八頃)には「足輕丁」とも呼ばれていた(松山城絵図⑤)市図書館ことがあらしく、同じ水谷氏の頃の元禄七年(一六九四)正月改めの記録(『水谷史』)「御家内之記」には「鉄砲町」と「上鉄砲町」に分かれていて、「鉄砲町、長さ四一間(約七四メートル)、家数八七軒」、「上鉄砲町長さ一町二間(約一三〇メートル)、家数二二軒」とあります。その後石川総慶の時代(正徳元年一七一〜延享元年一七四四)になると戸数一〇五軒、一〇七人(増補版高梁市史)が住んでいました。そして「松山城下絵図⑤」(市図書館)によると東側(新丁側)に空家を含め家数五〇、西側(高梁川側)に空家を含め五二軒の家が描かれています。また、延享元年六月調べの「松山家中屋敷覚」(市図書館)には、「鉄砲丁三六軒、内給人屋敷三〇軒、一軒長屋六軒」と記録されています。その後、板倉氏の嘉永(一九四八〜一八五四)・安政(一八五四〜一八六〇)頃には

武士の人数も減少し、町の規模が縮小して家数四と長屋四、そして二十九人の武士の名が挙げられています(「昔夢一班」)。

「鉄砲丁」時代の記録をみると、水谷氏の頃が家数も人も最も多かつたことが分かります。

また、江戸初期の正保年中(一六四四〜一六四八)には、寛文一〇年(一六七〇)水谷氏によって南町が取立てられるまで、備前往来が下町から牢屋小路に折れ「鉄砲丁」を通っていました。

川沿いにあった「鉄砲町」は明暦元年(一六五五)や享保六年(一七二二)、明治十三年(一八八〇)昭和九年など多くの洪水の被害を被った記録が残され、当時護岸は竹藪でした。また、鉄砲丁から出火した宝暦元年(一七五二)の大火は「焼け残った家が二軒のみだった」(増補版高梁市史)といわれています。

町の川側には、女性神とされ、大山祇神とその娘の木花開耶姫を祭神とし、古くから生業の神とされた山神社が鎮座しています。

「鉄砲町」という地名は、城下町の地名として各地に見られますが、鉄砲鍛冶などの職人を集めた町の意味と、高梁のように江戸時代の城下の家中屋敷町として鉄砲足輕が居住した城下地名としての二つの意味があります。

いずれにしろ、江戸時代初期から大名が鉄砲を進歩した武器として重んじていた有様が今に伝わってくる歴史地名なのです。

(文・松前俊洋さん)



南から見た現在の鉄砲町